

「ふるさと春日井学」研究フォーラム

Forum for Furusato Kasugai Studies

「ふるさと春日井」まちづくりへの応援メッセージ

『ふるさと意識なくして地域の活性化なし』

会報

NO. 56

2018.1.20 発行

編集責任者：河地 清

Kawachi-k@mb.ccnw.ne.jp

第56回「ふるさと春日井学」研究フォーラム

ふるさと春日井を築いた人々

テーマ『林 金兵衛 とは、どんな人物か』

平成29年12月3日（日）市民活動支援センター（ささえ愛センター）において「ふるさと春日井学」研究フォーラムをテーマ：ふるさと春日井を築いた人々『林 金兵衛とはどんな人物か』と題して、本会会長の河地 清氏に講演していただきました。

林 金兵衛については、本会フォーラムの9回「ふるさと春日井の危機を救った、林 金兵衛」、21回「石碑に刻まれたふるさとの歴史－林 金兵衛君碑を中心に－」、48回「明治10年代における地域再生－春日井郡の自力更生運動を中心に－」そして今回の「林 金兵衛とはどのような人物か」と発表をされてきています。氏は、大学院在学時代から約半世紀に渡って林 金兵衛研究に取り組んでこられました。「近代的租税制度としての地租改正事業の本質－福澤諭吉と林 金兵衛を中心に考察と検証－」の研究によって、名城大学で博士（商学）の学位を取得されました。また、著書『福澤諭吉の農民観－春日井郡地租改正反対運動－』（1999年日本経済評論社）があり、福澤諭吉協会会員として福澤諭吉研究者として活動しておられます。今回は、林 金兵衛の人間像という視点から、金兵衛の人物像に迫る、「人間林 金兵衛」という内容でお話いただきました。

フォーラム参加者は、25名でした。



講演する 河地 清 氏



会場風景

一発表要旨一

これまで何度も「林 金兵衛」に関連した講演をしてまいりましたが、「人が歴史を創る」と言う視点で人物像に迫る内容のものがありませんでした。「人が時代を創り時代は人を創る」という歴史の法則を考えたとき、「人物＝人間」の解明こそが歴史の本質にせまる意味で避けて通れないテーマであると考えています。

その意味で、人間「林 金兵衛」に迫ってみました。「林 金兵衛」研究は、小牧市の郷土史家津田應助によって研究史の嚆矢となりました。明治維新史研究のなかでは、維新の功臣として、日本資本主義論争史、日本経済史研究の中では、豪農モデルとしての研究がテーマとなってきました。林 金兵衛その活動と思想は、地域の発展、振興に大きな影響を及ぼしました。晩年に勃発した、地租改正歎願運動への取り組みは、金兵衛の人間性の全てがさらけ出された出来事でした。福澤諭吉との出会いは、金兵衛の生涯の集大成となる生き様を示す出来事でした。今回の講演の目的は、従来までの金兵衛研究をまとめながら、金兵衛の人間像に迫りたいと思います。

I.「林 金兵衛」はどのように評価されてきたか。

大義、義気を貫いた生涯であったことを、「林金兵衛翁追憶略記 桐原捨蔵」の中で『翁の風采が魁偉^{かいい}を極め堂々六尺に近き軀幹^{くかん}を有し眉秀でて眼光人を射るものあり鼻高く口締り鬚髯^{しゅぜんさんさん}々々として威容自ら備わり言動荷^くもせず言えば必ず肺肝を砕き人を動かさざれば己まざるものあり一見直ちに佐倉の義民木内宗五郎も斯くやと許り推服を禁ぜざるものなり』と述べています。桐原捨蔵（旧姓河野）は、金兵衛が地租改正歎願のため東京に滞在した折



に福澤諭吉に出会わせた慶応義塾生であった。そして、福澤の指示で金兵衛の世話を何くれと無くし、金兵衛達の歎願運動の一部始終を見つめてきた人物でした。明治維新の功臣として養嫡子林小参が叙勲の誓願をする際に桐原捨蔵に依頼して一文を寄せてもらったものです。

金兵衛の言う「大義」とは、勤皇・尊皇でありました。これは、絶対的に幼少の頃から、金兵衛の身に染みついた考え方でした。朝命は、金兵衛にとって絶対的正義でした。こうした意識形成の源泉は、幼・少年期の水戸国学者富田主水との出会いでした。

文政8（1825）年～明治14（1881）年

「大日本史」を学ぶ中での安寧天皇第三王子の血統を引き継ぐ、先祖今井四郎兼平が将木曾義仲の忠臣であったにもかかわらず、天皇に弓を引く賊軍となったことに強い疑問をもった。しかし、兼平の命を賭けた忠義の行動こそが誠の心であることを師主水に諭され、林家の誇りと、大義に忠義を尽くす尊皇、勤皇は、金兵衛の人格形成の柱になっていったと言えます。金兵衛にとって、大義は朝命であり尊皇、勤皇の大義名分は、林家の家伝でもあり、金兵衛

の生きる指針でもありました。金兵衛 15 歳の時に詠んだ和歌「学べたゝこのわさことは身
をおさめ國を治る^{もののふ}武士の道」が人格形成の一端を物語っています。

2. 尾張藩主徳川慶勝と側用人田宮如雲との出会い

幕末維新の激動の時代は、林家と金兵衛にとっても大きな転換期でもありました。名家であり、歴代の名望家でもあった林家は、村落行政の指導者として、尾張藩の絶対的信頼を得ていた数少ない家柄でした。文久 3（1863）年の藩家老田宮如雲の雨の降りしきる夜の来訪は、それを物語っています。如雲は、藩屏の予備軍としての農兵隊結成の要請にわざわざ来訪したと思われます。その際如雲自作の漢詩を揮毫した掛け軸を持参していました。

林家が代々藩に尽くしてきた功績を褒め称えるとともに勤勉な模範的農民として村落振興に勤めていることを賞賛する内容のものでした。如雲は、藩主慶勝に最も信任の厚い側用人として、辣腕を振るっていました。後の「青松葉事件」では、金鉄党の首領として、藩主慶勝の意思決定に大きな影響を与えた人物です。金兵衛にとって藩主の命は、朝命に等しいものでした。如雲来訪後藩主慶勝からも慶勝直筆の「積善之家必有餘慶」の掛け軸を賜っています。上条城内の三餘邸の書斎に掛け軸を掛け「餘慶堂」と称し、雅号を積善斎と名乗ったほどでした。風雲急を告げるこの時代慶応 4 年を起点として金兵衛は、ダイナミックに行動して行きます。田宮如雲の指揮下のもと金兵衛率いる農兵隊「草薙隊」は京都御所の警護、高山、葦山と各地を転戦して行きます。政局は、尊皇攘夷か佐幕か、尊皇倒幕か佐幕か、攘夷か開国か、めまぐるしく政局が変化して行く激動の時代の流れのなかで、藩内における慶勝の意思決定は、会津藩主松平容保、桑名藩主松平定敬兄弟が佐幕派であるにもかかわらず、尊皇倒幕に傾き「青松葉事件」がそれを、決定付けたことは、周知の歴史的事実です。このことは、徳川御三家の筆頭尾張藩が倒幕に荷担することによって歴史が大きく動いたことも歴史的事実でした。一方金兵衛は、大きな時代のうねりの中で、政局に左右されることなくただひたすらに藩命（田宮如雲の指揮）と自らの「尊皇」の大義名分一筋に忠義を全うし、その任務に奮闘していたことがわかります。結果的に、金兵衛の事績、活動は、明治維新新政府樹立に少なからず貢献したことになったと言えるでしょう。その意味で明治維新の功臣としての評価は妥当なところではあります。

3. 福澤諭吉との出会い

金兵衛の生き方を大きく左右した出来事が、明治新政府の行った、地租改正事業の実施でした。言うまでもなく、この事業は、近代的租税制度の確立を急ぐものでした。藩政時代の藩命は、最も信頼できる慶勝からのものでしたが、御一新によって、その指示命令は、新政府（県庁）からのものとなったことは、新時代に少なからぬ希望をもっていた金兵衛達の期待を大きく裏切るものでしかありませんでした。「無理無束」（金兵衛日誌）の地価詮評と問答無用の役人の姿勢に憤りを募らせ、義憤を行動に移さざるをえなかった金兵衛は、春日井郡 125 ケ村の先頭にたって異議を申し立てていかざるをえなかったのです。春日井郡地租改正反対騒擾事件の始まりでした。

大義のためにひたすら忠誠を誓って生きてきた金兵衛にとって、新時代における大義とは

何かと考えさせられるできごとであったと思います。義気の生き方を貫いて生きてきた金兵衛にとって、降り懸かった理不尽な事態は心の中で許すことはできなかったのです。

「なんとかせにゃあいかん」（林千代氏聞き取りによる）が口癖であった金兵衛の行動は、最後まで義気の信念でぶれることはなくまっすぐに官に対する抵抗として突き進むこととなっていきました。

福澤諭吉との出会いは、正にこの時でした。この出会いを偶然と見るか必然とみるかは、重要な論点だと思いますが、私は、必然の立場をとりたいと思っています。それは、優れて人間金兵衛の強烈な主体的個性が目的意識をもった出会いが出会いを生み出していったことの結果であると考えからです。一途な、一直線に突き進む金兵衛の姿は鬼気さえ感ずる思い詰めた姿であったことが想像されます。そんな姿の金兵衛に手をさしのべたのが福澤でした。予てから福澤の信条には、「抵抗の精神」（福澤諭吉全集参照）というものがあって、理のある者への深い理解が立場の如何に問わずありました。金兵衛の理路整然とした、恐れを知らない話振りと「なんとかせにゃあいかん」という一途なオーラが福澤の心を動かし共感したのではないかと想像できます。明治11年2月23日小雪の舞う三田の福澤邸での対面の情景でした。金兵衛は、その日の日誌に「福澤先生は、大先生である」「顔四角で大きく左頬に大きなほくろあり」と細かく認めています。金兵衛の一生懸命さが時のオピニオンリーダーに通じた一場面でもありました。福澤との出会いは、その後の金兵衛の人間関係の巾を広げてゆくことにもなりました。そして、福澤から新しい知識やものの考え方も学ぶことになりました。福澤思想に触れることによりその後の金兵衛の行動の指針となっていったのです。嫡子國太郎を交詢社に入社させたり、第一回愛知県県会議員に当選（明治12年3月）した後自由派（立憲改進黨系？）として活躍して行ったことに現れます。歎願運動の中で起こった「天皇直訴未発事件」（明治11年10月25日）で命を賭して押し寄せる何千という農民の前に立ちはだかった行為は、福澤の説得もさることながら、もとより大義に生きる金兵衛にとっては、あたりまえの行動であったのかもしれませんが。福澤思想の影響は、明らかに金兵衛の意識に変化を与えました。

結びにかえて

人物評価について、福澤諭吉は次のように戒めています。「人の心志は時々刻々に一様ならず、今日の承認は明日の君子と為り、去年の善人は今年の悪人と為る可くして、生涯の間には其の所業々変遷するものなれば、人物を評するに一時の言行を聞見して遽に其の一生の価を定む可からず」（明治7年「傑氏万邦史略序」より）とっています。焦って人物を評価してはいけない、よく観察して、先入観で判断したり最良のひきたおしになったりすることは、古今神ならぬ人間の陥りやすい過ちであるとも戒めています。時が経過し時代が変化するとともに真実が自ずと姿を現すことがあるからであるとも言っています。

今年は明治維新150年の歴史の節目を迎えています。「ふるさと春日井」の明治維新を考えるなかで、林 金兵衛が地域に果たした役割を再評価することによって人間林 金兵衛の実像がより真実に近づくのではないのでしょうか。

日井市民の参加の場をつくるべく「ふるさと春日井学」研究フォーラムを設立し、多くの市民が「ふるさと」に関する歴史、文化、自然、産業等について学び、主体的に参加し「ふるさとまちづくり」の「研究」・「討論」・「交流」の「場」としてゆきたいと思います」というものでした。

この趣旨目的がこの5年間でどれだけ達成できたかは、具体的に「まちの活性化」に繋がる現象がでてきてからではないかと思っています。この5年間の「ふるさと意識」の醸成活動によって少なからずその萌芽らしきものが見えてきたことも事実です。このことは、実践報告論文、拙稿『「地域活性化」の本質的方法試論ー「ふるさと春日井学」研究フォーラム実践の検証ー』（修文大大学研究紀要 NO. 8 2016. 3）でまとめてみました。

「意識が変われば行動が変わる」行動が変われば環境が変わる」実に息の長い時間の掛かる実践活動であると思っています。地道に出来る範囲で、無理をせず、こつこつと、「ふるさと春日井の魅力、特色」を伝え続けてゆくことが大切なことだと思っています。「ふるさと意識」が広範に根付くことこそが地域を愛し、地域に愛着をもち、地域が元気になってゆく過程であると信じます。その意味では、「ふるさとファースト」の考え方と言えますが、言い換えれば、グローバルだけではいけません、グローカルの視点も重要です。「ふるさとファースト」の視点からグローバルな視点を考えることが必要です。現代社会はそんな社会だと思います。であるが故に、自らの足元である地域を見つめ直さないといけない時代だと思っています。従来の経済優先の発想からは、全然御利益のない話しだとの批判は百も承知の上で敢えて語らなければならない時代が今日だと思っています。

現代社会は、しかし、そうではないという新しい「価値観」が我々の意識を変えようとしているのもリアルな現実です。「地域の魅力・特色」を再発見し文化・歴史・自然の資源を生かす取り組みが今日当たり前になってきているからです。

その意味において「ふるさと意識」醸成運動は、いつの時代においても続けられなければならない課題であり責務ではないかと思っています。（文責：河地 清）

「ふるさと春日井学」研究フォーラムのご案内

第 57 回「ふるさと春日井学」研究フォーラム

2/4（日）テーマ「鳥居松地域の歴史と活性化の取り組み」

講師：河地 清（「ふるさと春日井学」研究フォーラム 会長）

場所：ささえ愛センター PM1:30～3:30

（非会員の方のみ資料代 500 円徴収させていただきます。）

※事務局：〒486-0825 春日井市中央通り 2-9 TEL・FAX0568-82-5973 会長 河地 清

mail address:kawachi-k@mb.ccnw.ne.jp

かすがい市民活動情報サイト：<http://kasugai.genki365.net/>

ふるさと春日井学検索



今後のフォーラム案内は中日新聞「ウィークエンドガイド」（毎週金曜日）近郊版で発表

